

同窓会の夜、人妻になった彼女と続きを――十二年越しの二次会――

あの頃、言えなかった。人妻になって再会した元同級生と、二人きりの夜に

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

高校の同級生はみんな、速水由佳はやみゆかのことを「しつかりした人」だと言う。

旧姓・中谷由佳。あの頃から、教室のどこにいても背筋の伸びていた女子。今は穏やかで品のいい人妻になって、同窓会の幹事の連絡にも、きちんとした文面で返事をよこす。誰もが「いい奥さんになったね」と口を揃える、隙のない佇まいたたずまい。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のとりみが、ホテルの一室を満たしていた。間接照明のほのかな橙だいだいだけが点って、カーテンの隙間から、眠らない街の灯りが遠くにかすんでいる。十二階の窓の向こう。彼女が普段暮らしている家も、その家で待つはずの夫も、今はひどく遠いことのように思えた。

昼間の由佳を思い浮かべる。同窓会の受付に立ち、十二年ぶりに会う同級生のひとりひとりに、品よく頭を下げていた。紺のワンピースの背筋を伸ばし、誰に対しても一步引いた丁寧さを崩さない。左手の薬指には、細い指輪。誰もが「中谷、変わらないな」と笑った、あの落ち着いた微笑ほほえみ。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……元くん」

ゆるく巻いた栗色の髪が、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていた。いつもは穏やかに伏せられている目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてくる。左手の薬指で、細い指輪が間接照明をにぶく弾く。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させた。

壁の薄いこの街では、人の暮らしは、いつもどこかで誰かと地続きだ。けれど今、この部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。彼女の夫も、同窓会で笑い合った同級生たちも、何ひとつ気づいていない。それでいい、と元は思った。この夜は、二人だけのものだ。

十二年前、同じ教室にいた。隣の席で、同じ黒板を見ていた。放課後、窓の外が茜色に染まるまで、机を並べて、同じ問題集を覗き込んでいた。あのとき言えなかった一言を、ずっと、胸の奥にしまったまま生きてきた。その人が今、俺の前でだけ、何ひとつ

取り繕わない顔をしている。十二年という遠回りの果てに、ようやくたどり着いた、この一夜。



——ここから先は製品版でお楽しみください——